

唐代の散逸医書『古今録驗方』から見た 六朝期の散逸医書『僧深方』

多田 伊織

京都大学人文科学研究所

本発表では、佚書相互に引用による継承関係が存在することを、多数の散逸医書を含む、丹波康頼の撰になる『医心方』と唐・王燾『外台秘要方』(以下『外台』)が引用する六朝期の散逸医書『僧深方』と唐・甄立言の手になる散逸医書『古今録驗方』(以下『録驗』)との関係から探る。以下は、『外台』所引の『録驗』の内、現在残る先行医書『傷寒論』『金匱要略』『肘後備急方』や、散逸医書に載る同方・類似方が『僧深方』に先行せず、現在の段階で『僧深方』所載のものが最古となる処方について、『僧深方』との関係を比較したものである。

まず、『外台』所引『録驗』「療肺癰方。又(第三)療肺癰, 経時不差, 桔梗湯方」と『医心方』所引『僧深方』「治肺腸癰, 経時不差, 桔梗湯主之方」はほぼ同方である。しかし『録驗』は出典を挙げない。『録驗』の「療身体癰瘍, 斑駁, 女敷膏方」も同方である『僧深方』「療身体易斑剝方(第三)」に触れない。こちらは『録驗』の方がやや詳しい。丹波康頼が記述を省いたか、参照した『僧深方』が簡略だったかは不明だが、対比により、『僧深方』の本来の処方を復元できる。『外台』所引『録驗』と『僧深方』で見た関係は、『医心方』所引の『録驗』の「治目赤痛黄連湯方」と『外台』所引『僧深方』の「療眼赤痛, 除熱黄連煎方」との比較でも確認できる。『僧深方』は『録驗』の「古方」に多くの材料を提供しているが、『僧深方』の名は潜んでいる。

『僧深方』だけではない。『録驗』は、後漢から隋唐に至る散逸医書、後世改変された医書を、唐代のある時期に伝えられていた形で残していると考えられる。『録驗』は、甄立言のオリジナルの著作ではなく、その名の通り、古今の効き目のある処方を博搜して編纂した医書といえよう。

『録驗』の後に成立した『千金方』と『外台』所引『録驗』が同方を引用し、『千金方』の宋臣注から『僧深方』の原形を復元できるのが「棘刺丸。療男子百病。小便過多, 失精方」である。『千金方』の「棘刺丸, 治虚劳諸氣不足, 夢洩失精方」には、北宋の校正医書局によって、『千金方』が再整理されたときに付された「宋臣注」に『僧深方』が引用されている。

『外台』所引『録驗』と『千金方』宋臣注を比較すると、『外台』所引『録驗』は「深師同」とし、あたかも同方のようなのだが、『千金方』宋臣注では、『録驗』は『僧深方』の原方に対し、薬味が五つ異なる。『千金方』は『僧深方』と同方であり、かつ『僧深方』には症状によって適宜薬味を加減する附方があった。更に、『録驗』では、賦形剤として「卵の黄身」を用いるのに対し、『僧深方』では、「卵の白身」を用いる。

決定的な違いは、製剤の際に、『録驗』は「5~6000回杵で搗く」と、極めて煩雑な手順を要求している点である。こうした手順は、たとえば『医心方』が引用する『僧深方』の「西王母玉壺赤丸」のような道教系の丸薬を製剤する際にも要求される。これは、薬剤に神秘性を付加するための儀式的手続きと考えられる。『千金方』ではこの手順が省かれており、孫思邈は、製剤法を合理化する方針に転換したことが窺える。

六朝期の医書『僧深方』を引用する際に、薬味を代用して古来の煩雑な製剤法を採用する『録驗』と、薬味はそのまま製剤法を簡略化した『千金方』とは、同じ唐代の医書でも観点は異なる。『録驗』は呪術的な部分を残すが、『千金方』は製剤を簡略化する途を選ぶ。道教の大立者である孫思邈が、こうした態度を示していることは興味深い。医術が呪術と分かちがたく結びついていた段階から一歩足を踏み出し、過度の神秘性を捨てて、一般化していく過程がこうした記述の意味するところであり、それが唐代において六朝期の医書を引用する態度に表れているのである。